ふるさと歴史民俗散歩

第27回

開拓民の心の支え「地神」塔

宇都宮伝統文化連絡協議会員　柏村　祐司

宇都宮環状線沿い、宇都宮南警察署の東約三〇〇㍍に西原北公民館がある。この公民館敷地の北端に「地神」と刻んだ自然石の塔がある。地神塔は、栃木県内では極めて珍しい塔である。いったいどのような経緯で建てられたものであろうか、大いに疑問を持つ塔である。

この塔の側面に「昭和十九年三月吉日　東原氏子一同」の文字が刻まれている。この地は現在若松原と称されているが、以前は東原と呼ばれた。同じ広場にもう一つ「開拓記念碑」と刻まれた高さ二㍍四〇㌢程の石碑が建つ。裏面に、東原の荒れ地が開拓されたのは昭和十六年で、開拓者は北海道からの移住者十五名で、開拓面積は三十五万平方㍍である。開拓が無事達成されたので、昭和五十一年十一月に開拓三十五周年を記念して碑を建立したとある。

開拓記念碑

筆者がこの地神塔と開拓記念碑を調査したのは、昭和六十年の頃である。当時は開拓に直接あたった古老が健在だったので、古老たちから開拓の経緯について聞取りを行った。それによると東原の開拓は、旭川市の北東に位置する比布町や愛別町からの移住者によってなされたという。その比布町および愛別町も、もとはといえば明治期に和歌山、愛媛、香川等の各県からの移住者により開拓されたのである。

ところが昭和になって比布町および愛別町の一部の人々が埼玉県所沢に移住した。しかし、そこに陸軍の飛行場が建設されるということで、宇都宮市西川田に再移住してきたのである。

この西川田の再移住地に昭和十五年頃、比布町に住んでいた者二名が、先祖の地である愛媛県へ行った帰り道に立ち寄った。その折に、西川田の東に開拓に適当な土地があるので、移住してみてはどうかという会話がなされた。その話は現実となり昭和十六年暮れに移住第一陣が、昭和十八年に第二陣がやってきて都合十五戸が揃ったというのである。

ところで比布町や愛別町辺りでは、地神塔が各地に建立され篤い信仰を受けている。東原の地神塔は、ふる里北海道の風習がそのまま取り入れられ建立されたのである。しかし、北海道の地神塔も、もとはといえば内地からの移住者によってもたらされたものである。ならば内地のどこからもたらされた風習なのであろうか。

前にも述べたように比布町や愛別町の開拓者は、おもに和歌山、愛媛、香川県等からやって来た人たちであり、東原には愛媛県に先祖を持つ者がいた。そこで地神塔について調べると、四国、特に徳島県を中心に愛媛や香川県に地神塔を建てる風習が見られる。したがって東原の地神塔の源流は、愛媛県あたりであり、それが比布町や愛別町を経由して東原へと持たらされたものと考えられる。

さて、四国における地神は、じじん様と呼ばれ、土地の神、あるいは開拓の守り神、農耕の神として信仰されている。比布町、愛別町、東原に共通するのは、ともに開拓地であり、いずれの地にも地神塔が建立された。地神塔建立の目的は、開拓が無事成しえることを願っての思いからではなかったろうか。今では住宅地となっているが、東原の地神塔は、そこが昭和の開拓地であった証である。

しめ縄を巻いた地神塔